初期万葉

山路平四郎
窪田章一郎 編

早稲田大学出版部

初期万葉

山路平四郎
窪田章一郎　編

早稲田大学出版部

初期万葉　　古代の文学 5

昭和54年5月31日　初版発行

¥2,000

検印省略

編者　山路平四郎
　　窪田章一郎

発行者　城下幸雄

発行所　早稲田大学出版部

〒160 東京都新宿区戸塚町1—103
振替東京3-1123 電話(03)203—1551

落丁・乱丁本はおとりかえします。　東亜印刷・東栄社製本
1092-1605-9314

目次

◇

初期万葉の世界……森　朝男（一）

◇

雄略天皇の御製……山路平四郎（一八）
磐姫皇后の歌……横倉　長恒（三三）
聖徳太子の歌……松波　静子（四六）
舒明天皇の御製……森　朝男（五四）
中皇命の献歌……小西　淳夫（六五）
中大兄の三山歌……福島　秋穂（七八）
額田王の短歌三首……橋本　喜典（九五）
額田王の三輪山哀別歌……土井　清民（一〇四）
蒲生野遊猟の歌……佐佐木幸綱（一一九）
天武天皇の御製……上野　理（一三〇）

麻続王の歌……棚木　恵子（一四三）
鏡王女の歌二首……内田　光彦（一五〇）
久米禅師・石川郎女贈答歌……島田　修三（一五九）
有間皇子の歌……喜多　上（一七一）
天智天皇関係挽歌群……都倉　義孝（一八〇）
天武天皇崩御関係の歌……内藤　磐（一九七）
大津皇子・大伯皇女の歌……山崎　正之（二〇九）
◇
野中川原史満の献歌……岡田喜久男（二二一）
斉明天皇の御製（Ⅰ）……橋本　達雄（二三〇）
斉明天皇の御製（Ⅱ）……秋間　俊夫（二四四）
◇
南島のエロティシズム……池宮　正治（二五六）
◇
主要参考文献解題・目録……池田　裕子
門倉　浩（二六七）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

初期万葉の世界

概　観

初期万葉とはあくまで初期の万葉、時代的には万葉の時代の初期を指しての呼称であるが、この時期は、実に和歌文学の成立ないし形成の時期に当っていたわけで、すなわち和歌史の劈頭の第一頁を意味する。したがって初期万葉の内実は、まさしく和歌文学の形成のダイナミズムにあり、その概念もまたこれを中核に据えつつ、構成されるところのものであらねばならないだろう。それはしたがって、きわめて文学史的な概念である。

戦後の研究史の中で、〈初期万葉〉の語に文学史的な概念としての定位を、積極的に与えようとした最初の試みは、田辺幸雄『初期万葉の世界』（昭三二）であったと思う。田辺氏はこの語の指示する範囲を四期区分法の第一期、すなわち壬申の乱（六七二）までに限定し、その期の歌のいわばアルカイックな風貌に注目して、それを時代の歴史的背景から説くことにより、「古代詩歌史の中になるべく無理なく位置せしめ」ようとした。爾来この語は一般に、四期区分法の第一期の範囲を指示するものとして用いるのが、通例となったようである。

しかしながら田辺氏がそこで初期万葉の特色を引き出した方法は、それなりに説得力を持ってはいるものの、なお歌風の印象的な批評の域を脱していないと思われ、四期区分法における第一・二期区分の方法が、やはり歌風の差異の、多分に印象的な感受に立脚してのものであるのと、大差ないのである。こうした方法による立論は、実は文学としての和歌の形成期として、初期万葉を真に論理的にとらえるためには、なお十分なものであったとは言いがたく、事実その後の、この期の歌に対する種々の研究を踏まえるならば、新たな検討も必要になってきたと言うべきであろう。田辺氏が昭和三〇年代という時点で、初期万葉を史的に定位しようとして果した成果は、もとより十分に評価してのうえのことではあるが。

ところで田辺氏は、おそらく右のような方法によったがために、初期万葉を四期区分法の第一期に限定しており、それはかなりの影響力をその後に持ったが、たとえばすぐ翌昭和三三年に刊行された西郷信綱『万葉私記』第一部は、「初期万葉」と題されて、そこにほぼ柿本人麻呂登場直前の歌までが拾われている。かように、初期万葉の時代範囲は、本来論者によって揺れうるものであった。いま初期万葉を和歌文学形成期として概念しようとすれば、むしろこれを人麻呂以前の範囲に、少なくとも天武朝末までに拡大する方が、有効であるように思われる。なぜなら歌風の変遷といったような、個個の歌々が文学作品であることを無条件に前提とした如き区分の方法を越え、歌の形成のありように肉薄して考えれば、数の多くない天武朝期の歌のかなりは、それ以前の伝説歌等の系列を引くものであって、そこで画期的な変化を持つものではない。ここに本書はあえて初期万葉の範囲を、ほぼ天武朝末までに拡大して考えることとする。

一方、初期万葉の上限はすなわち万葉の時代の上限をも意味することとなるが、これについては、古い伝承歌等の中に、それを越える時期の形成によるものが、多少ありうるとの留保をつけたうえで、一応舒明朝期を当てるのが一般である。したがって初期万葉の時代範囲は、ここにほぼ、舒明朝から天武朝まで約六〇年間と見うることになる。この六〇年は、政治史・社会史のうえからすると、古代国家が天皇の全国一元支配による、専制的中央集権体制を推し進めて確立する、推古朝から律令制定の文武朝までの時期に、ほぼ包まれると見ることができる。実は、後に説くとおり、そうしたこの時期の政治史的・社会史的変化に即応して、地域の共同体が崩壊し、貴族階級が形成され、共同体を基盤とした歌謡世界が流動して、貴族たちによって、文学としての歌、すなわち和歌文学が形成されてゆくこととなるのである。したがってまず基本的に、この期の歌は歌謡からの和歌の派生・自立の過程としてとらえられねばならない。

しかしながら一方、ここには宮廷の問題がある。そして伝えられるこの期の歌のほとんどは宮廷歌である。歌々のありようが、宮廷という特殊世界の中での、歌のありようの諸形態に、制約されているのである。その諸形態について、本稿ではおおよそ三つのものを考えてみることにしたい。物語的背景を持った伝説歌と、儀式歌と、そして宴の歌とがそれである。ただしこの三つは、たとえば伝説歌が宴の場で歌われるといったふうに、相互に重なりあう場合を持つかも知れない。

この期の歌は、巻一・二に著しく集中し、他に巻三・四・八・九などに若干を見うる。それらは合計して一〇〇首をわずかに越える程度であるが、もとより制作時の詳細を伝えない歌もあるから、数え方によって多少の増減がありうる。そのほかに巻一三の作者不明の長歌の中には、この期の歌であ

った可能性の考えられるものがあり、さらに『日本書紀』に見える歌々で、この時期のものと思われる歌がある（本書は参考までにその若干を選んでいる）。これらを加えると、数はやや増加するであろう。

作者判明の一〇〇首強の歌の中で、最も多くの歌を集中させている歌人は、額田王である。題詞の示すところによって数えれば一二首（重複歌を二首に数えれば一三首）で、全体のほぼ一割に相当し、この歌人のこの期に占める大きさを語っている。ただしこの中には、真正の額田王作でない歌が混在するかも知れぬ。

そのほかにこの期の主たる作者の名を掲げれば、磐姫皇后・雄略天皇など伝承時代の人々のほかに、舒明天皇・斉明天皇・中皇命・有間皇子・天智天皇・藤原鎌足・鏡王女・石川郎女・天武天皇・大津皇子・大伯皇女などとなる。大津・大伯は厳密には持統朝の歌人とすべきであるが、いまあえて含めておく（次項参照）。一瞥していかに皇族が多いかを知る。これはこの期の著しい特色であるが、磐姫皇后や雄略天皇からのつながりによって考えれば、これらの皇族もまた幾人かは仮託作者であった可能性が思われる。また儀式歌などの領域にあっては、専門歌人が代作をなすといった事情が考えられ、ここに実作者と形式作者との問題が生じる。この期の歌人の存在態様は複雑である。

次にこの期の歌体は、長歌を主としながら、それに反歌として短歌を添える形式が見えたり、独立の短歌もかなりの量に達したりで、短歌体への傾斜が著しい。長歌はなお五・七形式に到らぬ不整形のものが多く、特に末尾を五・三・七で終らせるもの数首があって、この期の特色とされる。かような長歌の不整形性は、この期が歌謡から和歌への過渡期であったことを、示している。

伝説歌

ここに伝説歌と呼ぶものは、いわゆる伝説に付属する歌のことで、記紀の歌謡に最も一般的な歌のありようを指している。田辺前掲書が「譚歌」と呼び、土橋寛『古代歌謡の世界』などが「物語歌」と呼んだものにほぼ等しい概念であるが、これは記紀の歌謡のみにとどまることなく、万葉にも継承されていったと見る方がよい。

その好い例は雄略天皇歌（1・一）である。この歌は、例えば引田部赤猪子や春日袁杼比売への求婚の伝説といったような、『古事記』における雄略天皇求婚伝説の、一定の範囲の広がりの中に、本来物語を伴って伝えられた歌であったと考えうる。こうしたことは巻二巻頭の磐姫皇后歌（2・八五～八八）についても考えられる（三谷栄一「記紀から万葉へ」『国学院雑誌』昭四四・一一は、両歌は持統朝ごろの天皇・皇后観によって巻一・二各巻頭に据えられたとしつつ、同様な伝説の生成・拡大に着目する）。こうした性格の歌を更に拾ってゆくと、聖徳太子歌（3・四一五）、舒明天皇歌（8・一五一一）、有間皇子歌（2・一四一、一四二）、天武天皇歌（2・二五～二七）、麻続王関係歌（1・二三、二四）などに及ぶ。

右の歌々は、それぞれその成立年次にも、多少の差異を有し（中には、持統朝時代以降に仮託創作されたものもあろう）、歌形も雄略天皇歌のように古風なものを有しながら、多くは短歌に傾くといった程度の差異を持つ。しかしすべてが皇族の歌とされる点に共通点を持つ。これらの歌やそれにまつわる伝説のありようは、いわゆる旧辞的伝承世界に淵源すると見られるものであるが、推古朝以降の宮廷社会において、後の記紀への志向の外側におちこぼれたもの、ないしはそういうものを核にしつつ生成

消滅していった、数々の伝説や歌の世界を母体として、形成されたものであったろうと思われる。多くが短歌に傾いているのは、成立の時代のよほど晩いものが多かったと見られ、それらの一部は成立を初期万葉の範囲内に求めることが不可能かも知れない。しかしながら、こうした伝説歌が窮極において短歌に行きついていることは、初期万葉宮廷世界において、いわゆる旧辞的伝承世界を継承するような伝説や歌の、旺盛なそして自由な、時には明らかに文学的興味に近い志向性を持った生成が、反復していたことを思わせる。おそらく記紀の叙述に見られる、古風の歌と新風の歌との混在した話形は、そうした初期万葉期の情況の想定なしには不可能であろう。

これらの歌々の背景をなす伝説は、だいたい政争か恋かを主題としている。有間皇子歌・天武天皇歌・麻続王関係歌などは前者で、雄略天皇歌・磐姫皇后歌などは後者の例であったであろう。中には双方に関わる例もあったかも知れぬ。聖徳太子歌はやや例外である。こうした主題の性格は、いよいよ旧辞的世界との連関を思わしめるものであるが、やがてこの系列の歌は、天智・天武時代を場面とし、しかも主人公を主として皇子女や貴族の家の子女たちにずらせながら、政争よりもむしろ恋を中心とする話柄への移行を見せてゆく。巻二相聞部前半（持統朝期の歌々ぐらいまで）の部分を、歌物語的構想による白鳳宮廷ロマンス歌集とする見解がある（伊藤博『万葉集の構造と成立』上、七八～八六頁）。この論は主として、『万葉集』の構造や巻々の成立に関わるところからなされたものであるが、実はそこに収められた歌自体が、すでにそのようなものとして形成され、かつまた伝承されたものであったと考えてよいだろう。それらの中で主たるものは大津皇子と草壁皇子との同女をめぐる恋愛模様に関わる歌群（2・一〇七～一一〇）で、政争と恋とをからめた内容の話柄であったことを思わせ、遙か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

な旧辞的世界との呼応が認められるものである。

このような歌々は、旧辞世界とは違ってごく新しい天智・天武朝ごろの一定の事実を核として形成されてきたものである。おそらく歌われている事件と歌の成立との間の時間は、非常に短いものであったろう。これらの歌の成立時が、あるいは持統朝以降に下るものであるにしても、こうした歌々の成立に連なる、比較的身近な時代の誰彼の伝説化と、それに伴って生み出される伝説歌の数々とが、初期万葉期に大いに存したことは疑いがない。古い伝説を離れて身近な事件を素材にし、あるいは古い伝説を新しく拡大してやや異なる話柄のものとし、それに歌を付帯させる、といった自在な想像力の発露は、初期万葉期において次第に大陸の詩文に目覚め、文字を知り、しかも共同体を場として集団歌謡の地平から浮上して、それを相対化しうる知的な立場を確保した貴族たちによって、好んでなされたものであったと思われる。

その一つの傍証は、『日本書紀』歌謡群の末尾を採る童謡（わざうた）にあるかも知れない。童謡は大陸史書の例にならった歴史叙述の方法で、ひと口に言えば歴史的事件を予見暗示する、声なき民衆の間のはやり歌であるが、多くは史官たちが巷間の歌々に若干の手を加えて、歴史叙述の効果を高めるためにはめこんだものであって、かならずしも叙述されたとおりの事実として存在したものではないであろう。これもまた知的な作りものであった。史官たちがそのような童謡を作る、ないしは巷間の歌々にそのような意味を付与して歴史叙述にはめこむ、といった作業が、かならずしも例えば帰化系の史官たちの孤独な机上の営みばかりでなく、いま少し広がりを持って、そうした帰化系人と交渉を有した人々の一部にまで共有された趣好であったと見るならば、の話ではあるが——。

ともあれ、旧辞的世界に淵源しつつ徐々に変質して、おもに恋を主題とした伝説にはめこまれた伝説歌の系統を、初期万葉の歌の一つのありようとして、ここに認めておきたい。これは古い歌謡を応用したり、改作したりしながら、ついには純然たる創作歌を構想するまでに到っていて、文学としての歌すなわち和歌が自立しはじめるための、一つの情況を作ったものとしてよいであろう。

儀式歌

儀式歌とは、主として宮廷の何らかの儀式に際して詠唱された歌のことで、舒明天皇の国見歌（1・二）、中皇命の献歌（1・三、四）、額田王の三輪山の歌及び井戸王の即和歌（1・一七～一九）、天智天皇関係挽歌群（2・一四七～一五五）、天武天皇関係挽歌群（2・一五九～一六二）などがその例となる。これらは内容においてかなり多様に分れている。いまそのうち挽歌群をまとめて後にまわし、巻一（雑歌）所収のものについて考えよう。

歌の発生が祭式歌謡（というより祭式詞章というべきか）にあるとすれば、儀式歌とは、最も古く根源的な歌のありようを継承するものだと言ってよいのだが、一般に儀式歌は、その場が祭式でなく儀式であることにおいて、独自性を一定程度持ちうる。この場合に儀式とは、その中核に祭式を持ちつつ、なお政治的な意義や目的を付帯させて拡大したもの、あるいは祭式の変質（おそらくその形骸化や模倣形態化）したものを意味すると考えてよいだろう。これには当然何らかの支配機構が伴い、その最終的・決定的段階としての天皇権による国家支配機構が、初期万葉儀式歌と見合うことになる（もっとも真に最終的なのは人麻呂の時代であるとすべきだが――）。

こうした儀式歌をめぐる情況は、まず舒明天皇国見歌に見うる。この歌を叙景的な自然詠とする考え方は、今日ほとんどかえりみられなくなっている。中間の「国原は　煙立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ」は、写生でなく陸の豊作と海の豊漁とを歌ったとする説（山路平四郎「国見の歌二つ」『国文学研究』第二九集。有精堂版国文学研究資料叢書『万葉集』Ⅲにも）に従うべく、またこの歌の儀式歌的位相を王権の拡大過程に結んで、この四句の形成を、王権の拡大による農耕民国見歌への漁撈民国見歌の包摂の結果と見る説（古橋信孝「古代詩論の方法試論Ⅱ」『文学史研究』2）が、この歌をめぐる文学史を解明したものとして注目される。

国見歌は、……より……見れば、と歌い出し、以下に景物ないしは土地の呼称を列叙してゆくいわゆる列叙型から、特定の一対象を挙げて、讃美の辞句を以て讃える称揚型への変遷史を持つものであるが、この舒明国見歌は古い列叙型によりつつ、その列叙部分が陸と海とを列べる対句的方式によって、実は国土全体を余さずに表現し、しかも末尾三句に讃辞を配している点で新しい（拙稿「天つ神志向と国つ神志向」『国文学研究』第四五集）。呼称を列挙すること自体の中に讃意があるといった、古い呪的な言語性格を脱しつつ、しかもあえて古型に依っているところに、この歌の、呪術ないしは祭式のレベルを脱して、儀式としての国見の歌になりえている事情を看取することができる。

こうした儀式の歌としての特色は、中皇命の献歌（1・三、四）、額田王、井戸王の三輪山哀別歌（1・一七～一九）などにも認めうる。中皇命献歌は古風な長歌に新作の反歌を添えたものである（山本健吉『柿本人麻呂』他）が、ここにも狩猟を前にしての呪的な祭式からの脱却が認められる。もともとこの新作の反歌は、反歌として添えられたのではなく、長歌とは別個の歌として、二首という数え方

で献上されたものであろう（神野志隆光「中皇命と宇智野の歌」『万葉集を学ぶ』第一集、四四頁）。かかる新作をなしうる情況こそ、この時期の儀式の場であった。

一方額田王、井戸王の三輪山哀別歌は、三輪山への哀別の表現に、三輪山神祭祀の行為とその破綻とを潜在させて歌う、額田王の長反歌に対し、三輪山伝説の主人公である巫女的な女に身をなして、いわば虚構的な発想主体を仮構することで、その祭祀行為の破綻を越えようとする井戸王の「即和歌」とからなる（拙稿「遷都―近江遷都と三輪山哀別歌―」『万葉の虚構』所収）。祭式の破綻は、必然にその破綻を挽回しようとして、虚構を誕生させる。そして多かれ少なかれ、祭式から儀式への移行過程ではそうした現象が起る。先にふれた舒明天皇国見歌の「海原」が、ひとつの虚構的景物であったと見うるのも、同様の理由によっていよう。かくして三輪山哀別歌群もまた、この時期の儀式歌の位相を露呈したものであることになるが、そうした経緯の中で、一方、祭祀行為の破綻を嘆くことが可能となり、和歌的な抒情性も実現されてゆくのである。

次にこの期の儀式歌の一領域としての挽歌にふれよう。

万葉の「挽歌」という概念は多様性を持っているが、天智・天武朝期には、天皇崩御に際しての、皇后・皇妃・夫人など後宮関係の女性の挽歌が密集し、これはそれ以前にも以後にも例を見ない。それらの歌々は、すべて儀式歌と見うるかと言うに、判断の困難なものも含まれていて一様ではないが、「大殯」「御斎会」など、明らかに儀式の折に作られた歌を含み、他の例も多くはそれに準じて考えることが許されよう。

伝統的な葬習俗としてのもがりを基盤に、天皇などを中心とする貴人の場合に、大陸葬儀礼の流入

を受けて、殯という葬の儀式が成立するのは、安閑・宣化朝あたりであったとされる（和田萃「殯の基礎的考察」『論集終末期古墳』所収）。景行記の「大御葬歌」の如き鎮魂の祭式歌謡に代って、大陸風の死者哀悼の挽歌が登場する基盤は、そうした経緯のうちにあった（古橋信孝「記紀と万葉―挽歌の成立の問題」『万葉のことば』所収）。大化五年、帰化人系の野中川原史満の献呈挽歌などは、こうした新風の挽歌への帰化人の関与を示している。

ところで初期万葉期の皇室内の挽歌は、その歌い手の性格などからしても、いわゆる内廷に場を限定される。野中川原史満の場合も、中大兄皇子のための代作であるから、依然として、形式においてはこの範囲を逸脱しない。死者哀悼を主題とした抒情的挽歌の場が、この期にあってはなお葬儀の私的な場を中心としたものであって、そこに天智・天武崩御の折の後宮女性の挽歌群の存在もありえた。これは公的な場における発哀や誄に対応していたものと思われる。

しかしながら、たとえば天智崩御の折には、いわゆる宮廷歌人的性格を有していたと思われる額田王の作歌が見えるように、持統朝宮廷における柿本人麻呂の挽歌世界を予見させるものを内包しだしてもいたのである。とはいえ初期万葉期の宮廷挽歌は、あくまで死者のごく近親の人々によって、ないしはその立場によって詠まれることが前提になっていたようであり、その点においては、天智朝も天武朝も変らない。天武朝を初期万葉の範囲に含めて考えることの有効性はここにも存する。

以上、初期万葉の挽歌を一応儀式歌の範囲のものと考えつつ、なおそれが宮廷の私的機関である内廷を場とするものであったことを述べたが、これが大筋においては天皇の殯の儀礼の成立と見合うものであり、かつまた、そうした新しい時代の中で、旧来の鎮魂的祭式歌謡とは異なったかたちで、抒

情性の強い挽歌が登場してくることを確認した。

宴の歌

初期万葉の歌をめぐる諸情況の中で、特に文学としての和歌の成立にとって決定的に重要なものは、文宴・雅宴の形成である。

『懐風藻』の冒頭には「淡海朝大友皇子」の詩二首が見え、うち一首は「五言。侍宴。一絶」とある。同じく近江朝宮廷にあっては、天智天皇が藤原鎌足をして「春山万花之艶」と「秋山千葉之彩」とを競わしめたこと周知のとおりである。後者はやはり大陸風の文雅の宴を模するもので、詩によって春秋の優劣を競う場であったと想像される。こうした大陸風文宴は、この期の開明的な宮廷の姿勢や帰化人・遣使らの大陸文化運搬の中で開花したものであり、特に大和の旧共同体的世界を離脱した近江京宮廷社会において顕著に先導的に実現された。基底的には、宴の形成・拡大は、都市社会の形成へ向う共同体解体過程の中で、祭式から宴が自立することによるとする説（古橋信孝「古代詩論の方法試論」V『文学史研究』3）が、情況を総合的に言いあてている。

宴の歌と思われるものは、額田王の春秋判別歌（1・一六）、蒲生野遊猟歌（1・一九、二〇）などであるが、中皇命の紀の温泉行の時の歌（1・一〇～一二）などもそうであったと見られ、さらにまた独詠歌とおぼしい内容のこの期の歌の多くは、やはり宴の歌に属すると思われる。それらの歌の中には春秋判別歌のように、大陸風の文雅を基盤としたことが明らかな、自然の風趣を歌ったものや、独詠歌風の、感情表出に重点をおいた新鮮な歌がある。自然を賞美する態度も、個的な感情を表白する新

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com